

世界遺産『タオス・プエブロの伝統的集落』

～アートの街・ニューメキシコ州サンタフェ～



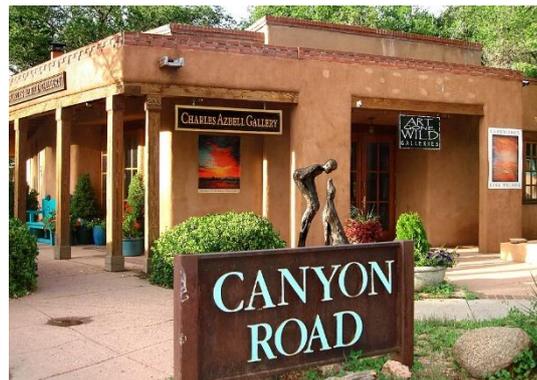
今年の夏は、とても暑かったですね。今回ご紹介する「サンタフェ」は、それ以上に暑い場所かもしれません。街並みは、アドベ(日干しレンガ)で造られた赤茶色の建物に統一され、とても印象的です。サンタフェは、アメリカ合衆国ニューメキシコ州の州都で、人口は約8万人とそれほど大きくはない街ですが、なんと「全米第2のアートマーケット」として知られ、ニューヨークに次ぐ規模を誇っています。また、世界遺産『タオス・プエブロの伝統的集落』の観光拠点でもあります。先住民族であるプエブロ・インディアンの伝統文化と、スペイン植民地時代の建築様式が見事に融合し、独特で魅力的な景観です。ニューメキシコ州は、その名の通り、この地域はかつてメキシコ領であり、16世紀のスペインの海外進出の影響が現在も色濃く残っています。サンタフェの歴史は古く、アメリカ建国以前の17世紀初頭には、街が形成されていました。さらに遡ること1,000年以上前から、プエブロ族がこの地に定住し、灼熱の暑さをしのぐためにアドベで建てられた住居で暮らしてきました。こうした伝統が、世界遺産『タオス・プエブロの伝統的集落』の誕生へと繋がりました。サンタフェには、12世紀初頭に建造されたアドベ建築の「アメリカ最古の家」や、先住民アーティストの作品を集めた「ネイティブ・アーティスト現代美術館」、ロマネスク様式の「聖フランシス教会」、ゴシック様式の「ロレット・チャペル」など、見どころも豊富です。アドベ建築、先住民族の文化、そして、スペインをはじめとするヨーロッパ文化が融合したサンタフェは、異国情緒あふれる魅力的な街なのです。



ネイティブ・アーティスト現代美術館

■ 「アートの街」サンタフェ

アートギャラリーが並ぶ「キャニオン・ロード」や、郊外に美術館や博物館が集まる「ミュージアム・ヒル」は、サンタフェのアート文化を象徴するスポットです。キャニオン・ロード沿いには、約 1.5km にわたって 200 軒以上のギャラリーが立ち並び、バイヤーや観光客で賑わいを見せています。今から約 100 年前、わずか数件のギャラリーから始まったサンタフェのアートシーンには、やがて全米各地からアーティストが集まり、現在では世界規模のアートフェアが開催されるまでに成長しました。特に、毎年7月に開催される「アート・サンタフェ」は、サンタフェ最大の国際アートフェアで、世界中から多くの美術関係者が訪れます。



キャニオン・ロード

私も「アート・サンタフェ」に出品したことがあります。世界各国の美術関係者に自分の作品を鑑賞してもらえる絶好の機会です。とても良い経験となりました。日本では、アーティストの作品発表の場として画廊や百貨店が主流ですが、海外ではアートフェアが中心です。ただし、アートフェアは、応募すれば誰でも出品できるものではなく、出展資格のある画廊や画商の取扱作家でなければ、なかなか叶いません。会場では、出展者である画商と、ブースを訪れた来場者との間で作品の購入交渉が始まります。来場者にはコレクターの他、アメリカ各地の画商も含まれており、ここで新人画家の発掘が行われることもあります。出品した画家本人が会場に足を運び、名刺を用意して自ら交渉に臨むこともあり、会場は真剣な空気が漂っています。

人口わずか8万人のサンタフェが、なぜニューヨークに次ぐ「全米第2のアートマーケット」になったのか……。その背景には、プエブロ族をはじめとする先住民族のアートの影響があります。サンタフェ周辺に暮らすプエブロ族や、アメリカ南西部に多く住むナバホ族など、ニューメキシコ州の先住民族たちは、独自の感性でアートを生み出してきました。彼らの作品は、絵画にとどまらず、工芸品や衣装など多岐にわたり、西欧のアートシーンにも大きな影響を与えています。こうした文化的背景に魅了された多くのアーティストがサンタフェの地に移り住み、街はいつしか「アートの街」へと変貌していきました。その代表的な存在が、女性画家のジョージア・オキーフ(1887年～1986年)です。また、サンタフェ近郊には、「チマヨ」という小さな街があります。人口3,000人足らずのこの街は、綿織物の産地として知られ、チマヨ織のベストなど、先住民族特有の文様があしらわれた製品が人気を集めています。

■ 女性画家「ジョージア・オキーフ」

アメリカ中西部ウィスコンシン州出身の画家ジョージア・オキーフは、アメリカのモダンアートを貫いた先駆的な存在です。彼女は1887年生まれで、同年代の画家にはマルク・シャガールや、建築家でもあるル・コルビジエなどがいます。日本人では、前年1886年に藤田 嗣治ふじた じゅじが生まれています。この時代、多くの芸術家が芸術の都パリに渡って学んだのに対し、オキーフはパリには行かず、アメリカ国内で活路を見出し、独自の表現を追求しました。

オキーフ作品において特筆すべき点は、その題材と、題材の捉え方にあります。彼女は花を主題とする作品を多く手がけましたが、一般的な画家が花びら、茎、葉、花瓶など全体を描くのに対し、オキーフは花びら1枚を大胆に画面全体に広げ、鮮やかな色彩で仕上げました。これは他ではあまり見られない、非常に独創的な描き方です。そして、彼女を一躍有名にしたのが、牛の頭蓋骨を描いた作品群です。そのリ



ジョージア・オキーフ

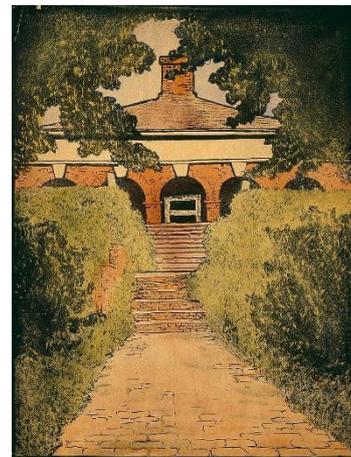
アルな描写力もさることながら、画面から伝わってくる圧倒的な存在感と生命感、観る者に強烈な印象を与えます。オキーフは、50代でニューメキシコ州に移り住み、以後約40年にわたってこの地を拠点に、制作活動を続けました。活動の拠点は、サンタフェから北西に約80kmに位置する「アビキューの村」などです。サンタフェのダウンタウンには、ジョージア・オキーフ美術館があり、彼女の作品を求めて多くの観光客が訪れています。



『ラムズ・ヘッド、ホワイト・ホリホック・ヒルズ』
(1935年) / スルックリン美術館

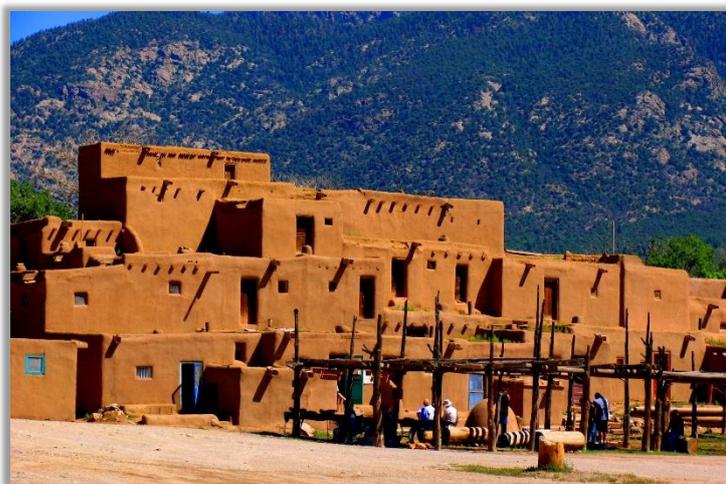


ジョージア・オキーフ美術館



『無題 (バージニア大学)』(1912-1914年)
ジョージア・オキーフ美術館

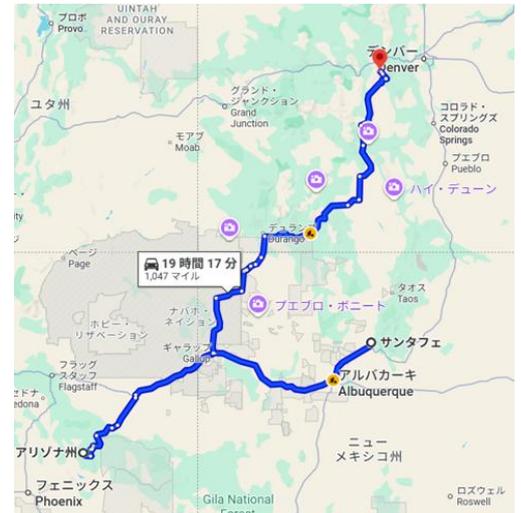
■ 世界遺産『タオス・プエブロの伝統的集落』



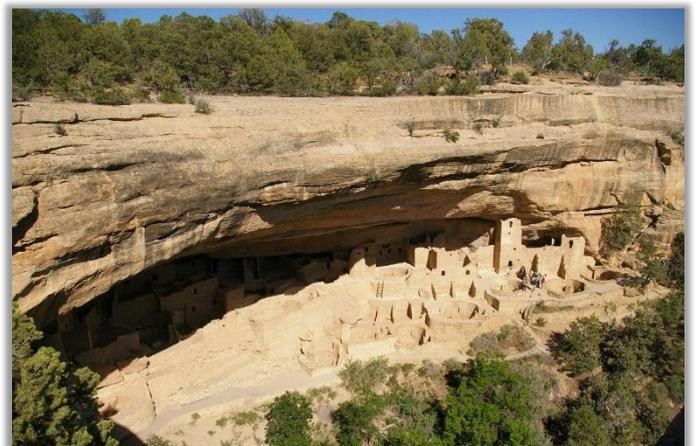
タオス・プエブロ

タオス・プエブロは、サンタフェの北東約120kmに位置しています。アメリカでは、このくらいの距離は“隣町”といった感覚です。荒涼とした大地をひたすら走行するバスの車窓から見える景色は、まさに「アメリカの原風景」と言えます。タオス・プエブロには、アメリカ最古の住居群が残されており、現在も100人以上の先住民族が実際に暮らしています。アドベを積み上げて造られた集合住宅で、「タオスの地に住むプエブロ族の小さな村」と説明すると、分かりやすいかもしれません。村には生活の営みも感じられ、小さなお土産店もあり、意外と楽しめます。電気や水道といった現代的なインフラはなく、灯りはランタン、水は近くの川から汲み上げて使用するなど、不便な環境の中で生活が営まれています。だからこそ、古来から受け継がれてきたネイティブ・アメリカンの暮らしが色濃く感じられるのです。

日本からサンタフェへは、ロサンゼルスなどで乗り継ぎ、ニューメキシコ州最大の都市アルバカーキまで飛び、そこからバスで約1時間半ほどで到着します。ニューメキシコ州の西隣には、グランド・キャニオンやモニュメント・バレーなどを有するアリゾナ州があり、サンタフェはその東側に位置します。アリゾナ州は自然遺産の宝庫。日本からの観光客も多く訪れますが、その先に在るニューメキシコ州まで足を延ばす人は、まだ多くありません。しかし、ニューメキシコ州には、今回ご紹介した『タオス・プエブロの伝統的集落』の他にもうひとつ、世界遺産「チャコ文化国立歴史公園」があります。これは10～12世紀にアナサジ族が築いた集落群で、『チャコ文化』として世界遺産に登録されています。さらに、隣接するコロラド州には、世界遺産『メサ・ヴェルデ国立公園』があります。1978年に世界で初めて世界遺産に登録された12件のうちの1件です。こちらにもアナサジ族が築いた住居群で、北米最大の先住民族の遺構として保存されています。これら3つの世界遺産を通して、アリゾナ州から東に広がるこの広大な地域に、いかに先住民族の文化が色濃く根づいているかが窺えます。先住民族たちが築き上げた伝統文化は、この地の集落を世界遺産へと導き、そして、「アートの街・サンタフェ」を生み出す大きな原動力となったのです。



チャコ文化国立歴史公園



メサ・ヴェルデ国立公園

沼田政弘